

# 東洋民俗博物館の歩み

九十九 弓 彦

## はじめに

私が運営する東洋民俗博物館は、1928（昭和3）年開設以来、わが母校の関西大学や奈良県下の諸館園と様々な交流があった。そこで、東洋民俗博物館の92年の歴史や主な展示品の紹介とともにその関係について紹介する。



写真1 東洋民俗博物館

## 設立の経緯

私の父九十九豊勝（1894～1998）は、早稲田大学在学中に、来日したシカゴ大学の人類学者フレデリック・スタール博士の通訳となったことから、民俗学に興味を持ち、国内外の民俗資料の収集を続けていた。

一方、当時の大阪電気軌道（後の近畿日本鉄道）は、1925年に奈良線の沿線開発事業として奈良市あやめ池に遊園地を開園し、1年後に市川右太衛門の映画撮影所を開設している。

大阪電気軌道は、さらに遊園地周辺に博物館を設けることを企画し、1928年5月、奈良線敷設の事故者慰霊を契機として交流があった九十九豊勝の収集資料を展示する東洋民俗博物館を建設した。今の東洋民俗博物館があやめ池遊園地の一角に創設することができたのは、近畿日本鉄道の招致があったからである。橿原市

にあった考古館と合わせたパンフレットも発行されている。



写真2 九十九豊勝初代館長

## 本館の建物

博物館の本館は、池を見下ろす丘陵地に建設された洒落た洋風の館で、翼を広げたように左右に展示室が伸びている。中央の玄関の両脇はステンドグラスで、図柄は若い女性の足をあしらったモダンなつくりとなっている。天井は、天候によって開け閉めできる回転式の強化ガラスがはめられている。この強化ガラスの天井は第一室戸台風で壊れ、現在はブルーのベスト屋根に変わっている。

特徴のある本館建物は、2013（平成25）年、奈良県教育委員会文化財課と奈良市教育委員会文化財課が調査した。その結果、奈良の近代化建築物遺産として優れていて、周辺の景観にもよく調和していると評価をし、その年に県立図書館情報センターで近代化建築物遺産のパネル展を開いたことがあった。

## 財団法人化

東洋民俗博物館の設立から20年近くたった1950（昭和25）年ごろ、東洋民俗博物館は菖蒲池遊園から独立することとなり、その後の資料



表



裏

写真3 東洋民俗博物館と榎原考古館のパフレット



表



裏

写真4 入場券

の散逸を防ぐために有識者の間で財団法人化への取り組みが始まった。中心になったのは、九十九豊勝の三男の千萬樹で、関西大学文学部と大学院を卒業し、奈良学芸大学で英語の教授をしていた。在学中に関西大学で博物館学課程を履修して学芸員の資格も有していた。当時徳島県庁に勤務していた次男の不二磨らも協力して1953（昭和28）年3月、財団法人の設立を文部省から認可された。

九十九千萬樹は財団法人の設立趣意書に次のように記した。

「人類史上、空前の破壊と絶望の荒れ地より、遅しく萌え伸びる若芽にも似た人々の魂は、この卑近な民俗資料によって人類の営みを再発見する。然して東洋民俗博物館は資料の収集、保管、展示と相まって社会教育の機能を果たすと確信する。」

理事長には三男の九十九千萬樹が就任した。

理事は、九十九豊勝の知人であり、千萬樹の恩師の関西大学教授、末永雅雄博士をはじめ、帝塚山短期大学の水木直箭教授、奈良女子大学の三鼓恵藏教授、高田高校の笹谷良造教諭、奈良学芸大学の長屋謙三教授、近畿大学の中前史郎教授、豊勝の妻で相愛女子短期大学の九十九たか教授。監事には、奈良学芸大学の横田利平教授と阿部孫四郎教授。顧問として、京都女子大学の江馬務教授、田幡病院長の田幡文夫医学博士、第三高等学校のP.D. パーキンス教授、近鉄の上野克己部長ら各界の人たちに依頼し、承諾された。

理事会は館長の九十九豊勝の意向を反映して、おおむね、趣味人の集まりのようなサロンの雰囲気だった。ところが、末永雅雄博士が発掘現場から理事会に駆けつけて話の輪に入ると、一気にアカデミックになり、場の雰囲気が引き締まったと初代館長の九十九豊勝は述懐していた。

その後、理事長には、三男の千萬樹のあとを継いだ四男の九十九弓彦が1983（昭和58）年に就任して現在に至る。弓彦も、関西大学出身で博物館学課程を履修し学芸員の資格を取得した。末永雅雄教授の考古学の講座を夜の天六校舎で受講したほか、博物館実習で上野の東京国立博物館の見学、奈良の新沢千塚古墳群の発掘調査も体験した。今考えると素晴らしい教授や環境に恵まれていたことに改めて感謝している。

### 東洋民俗博物館の展示物

東洋民俗博物館の展示物は、裏書がないものがほとんどで、どのようにして蒐集されたか不





写真5 開館当時の館内



写真6 開館当時のガラス屋根

明であるが、大半は、1928年に博物館がオープンした時のもので、初代館長の九十九豊勝が蒐集したものと、博物館のオープンに合わせて、スター博士が全国の愛好家に呼びかけて収集したのがあると思われる。

展示物は、大きく分けて三つに分類される。一つは日本の民俗資料。二つは外国の民俗資料。三つは森羅万象窟（九十九黄人の研究室）。その数はざっと1万点。展示資料は91年前の開館当時とほとんど変わっていない。展示の仕方や展示物の解説もほぼ当時のままである。学術的な意味があって系統だてて展示しているかどうかは分からないが、専門家によると、開館当時のままの学術的意識を保った展示は、博物館史的・人類学史的に興味が引かれるという。



写真7 展示室風景



写真8 展示室風景



写真9 南洋民族資料の展示

### 森羅万象窟（九十九黄人の研究室）

初代館長の九十九豊勝は、自らの号を「黄人（おうじん）」と名乗っていた。なぜ黄人か？黄色はイエローだから黄人はイエローマンをもじってエローマンというわけだ。博物館の裏の



写真10 森羅万象窟の書棚

一部屋を「森羅万象窟」とも「奥の院」ともよんで、性崇拜の蒐集や研究、道楽絵はがきや判じ絵作りなどを楽しんだ。

九十九黄人は、「民俗学の究極は性で、人類は性を神秘的なものとして信仰していた」というのが基本的な考え方だった。森羅万象窟には日本や世界で蒐集したグッズ、書籍、雑誌、彫刻、春画、浮世絵などや、イギリスのチャタレー夫人、中国の金瓶梅、インドのカーマストラ、阿部定の尋問調書、カストリ雑誌の「あまとりあ」、宮武外骨の「滑稽新聞」など貴重な書籍が並んでいる。

もう一つの黄人の趣味は、道楽絵はがきと判じ絵作りであった。大正時代から昭和時代初期の趣味人やコレクターは、「高等遊民」と名乗って絵葉書や判じ絵作りを楽しんでいた。この遊びを「我楽多」と称し、文字どおり「我楽しむ」の意味で、価値のないガラクタ（我楽多）を蒐集し、各地の趣味人と競い合ったことで有名であった。

#### 最近の東洋民俗博物館と動きとこれから

私（四男の九十九弓彦）はNHKを定年退職して、故郷の奈良に帰った。少し時間的に余裕ができたので、少しずつ博物館の整理を始めた。雨漏りしていた屋根を修理して青いベスト屋根に変えた。玄関のロータリーと博物館への登り口は、カラーのインターロッキングブロックで補修した。室内の展示方法は、基本的には開館当時と変わらないが、展示物が見にくいところ

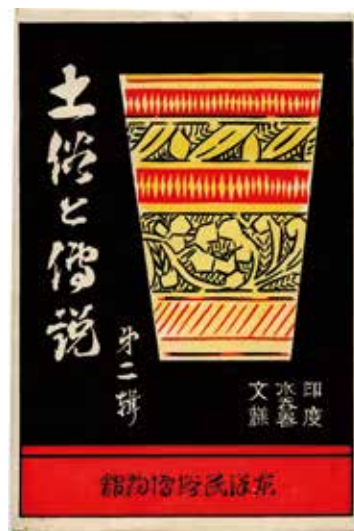


写真11 絵葉書の封筒

は思い切って陳列台を外した。また、絵馬のようなものは博物館の壁面一面に貼り付けて見やすくした。

さらに、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞などは奈良県版だけでなく、全国版で何度も特集し、テレビでもNHK、NTV、ABC、KTVなどが色んなコーナーで取り上げてくれるようになった。こうしたマスコミの報道と来館者のツイッターなどの書き込みの影響で、全く宣伝していないのに、入館者は毎年確実に増えてきている。奈良市が主催する「ひとまち大学」の講座では、毎回、募集定員20人に対して70人を超える応募者がある。特に最近では、若い女性グループの入館者が増えて、「性」に対する反応も戦前とは大きく意識が大きく変わってきたようにみえる。

今後の東洋民俗博物館の運営は、開館以来の難しい局面を迎えている。役員の高齢化に伴う後継者の問題をどうするのか。後継者がいない場合には、法人解散、閉館という道を選ばなければならないかもしれない。そうした場合の資料の散逸防止をどうするのかなど懸案が浮上している。

財団法人 東洋民俗博物館

〒631-0032 奈良市あやめ池北1-5-26

TEL：0742-51-3618

不定期開館：10：30～16：30

見学には事前予約が必要 入館料：500円

東洋民俗博物館 理事長